

トルコの「新しい貧困」問題(研究動向)

著者	村上 薫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	現代の中東
巻	41
ページ	37-46
発行年	2006-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005748

トルコの「新しい貧困」問題

村上 薫

はじめに

- I 「新しい貧困」の登場
 - II セーフティネットの破綻と再生
- おわりに

はじめに

近年、トルコのメディアや学界の注目を集めてきた問題に、経済のグローバル化とネオリベリズムの浸透がもたらす貧困がある。統計的なデータを見ると、経済自由化が開始された1980年代半ばから90年代半ばにかけて所得格差の拡大がみられたが、その後格差はむしろ縮小している。ジニ係数は87年の43.5から94年には49.1に上昇したが、2002年には43.9であった〔Förster and d'Ercole 2005, 14,62〕。貧困の量的な拡大に歯止めがかかる兆しがみられる一方で、貧困が引き続き注目を集めている背景には、底辺に沈んだ人々が再び上昇する道を閉ざされ、孤立させられることで、社会的結束がゆらいでいるという感覚がある〔Erdoğan 2002b〕。国際的な世論の影響も見逃せない。世界銀行の『世界開発報告』と国連開発計画の『人間開発報告』の1990年版では、途上国の貧困が依然深刻であるという認識が示され、これ以後、国際機関は貧困政策を重視する立場を打ち出した。80年代以

降のEU諸国をはじめとする先進国でも、不平等の拡大が社会的結束を喪失させていること、また戦後の経済成長と福祉国家の発達によりいったんは克服されたと思われた社会的・経済的な脆弱さが再び広がりつつあるという認識が広がった。所得の不足だけでなく、労働市場へのアクセスや社会参加の程度、政治的代表的権など、さまざまな次元で不平等が拡大していることに目が向けられたのである。これは、社会的排除（主にEU諸国）やアンダークラス（主に英米）の概念によって、社会経済の変容によって引き起こされる排除や周縁化という構造的な側面から貧困という現象をとらえ直す動きにつながった〔バラ・ラベール 2005, 1-3,127-137〕。

トルコの貧困をめぐるさまざまな議論のなかで注目したいのは、貧困に質的な変化が生じ、「新しい貧困」(yeni yoksulluk)が生まれているという指摘である。「新しい貧困」の議論の特徴は、欧米先進国（とりわけEU諸国）における議論に触発され^(注1)、ネオリベリズムの浸透と生産システムの変化というグローバルな趨勢の影響を認めると同時に、後発工業国としてのトルコの経済発展と社会的統合の特質が、貧困化の原因や現れ方に与える刻印に注目する点にある。この立場に立つ論者たちの主張は、おおよそ以下のようにまとめられる。①公的な社会保障制度

から実質的に排除されてきた貧困層にセーフティネットを提供してきた互酬的ネットワークが解体し、貧困層の間でさらなる弱者の排除が起きていること、②その背景では、ネオリベリズムの影響で、経済発展と社会的統合を支えてきたさまざまな条件の喪失という構造的な変化が起きていること、そして③互酬的ネットワークに代わる公的なセーフティネットを導入する必要性である。以下では、主な研究をとりあげ、議論を紹介しよう^(注2)。

I 「新しい貧困」の登場

1. 移動者社会の多様化

貧困の質的な変化が最も顕著に観察される舞台として注目を集めたのは、都市の移動者社会である。社会学者エルデルの「新しい都市住民と都市の新しい貧困者たち」[Erder 1995]は、都市の移動者社会における社会関係の変質と最貧層の形成を指摘した先駆的な論文である。エルデルは、イスタンブールの代表的なゲジェコンドゥ地区であるウムラニエでの調査を通じて、所得格差の拡大と社会の二極分化の趨勢が、それまで比較的均質に貧しかった移動者社会にも及び、その内部でさらなる二極分化が進行していることを指摘した。ゲジェコンドゥとは、農村からの移動者が大都市の周辺部の土地を不法占拠して建築した、建築基準を満たさない低質の住宅で、「一夜建て」の意である。トルコでは、農村への資本主義経済の浸透と都市の工業化の進展を背景として、1950年代から都市化が本格化し、イスタンブールをはじめとする大都市の周辺部に広大なゲジェコンドゥ地区が形成された。公的な社会保障制度から実質的に排除され

た移動者たちが、住居や職を得て都市の生活に適應する過程で重要な役割を果たしたのが、親族や同郷出身者などの地縁血縁関係に基づく互酬的ネットワークであった。トルコの社会保障制度はフォーマルセクターの労働者を対象とする社会保険制度を中心とし、インフォーマルセクターの労働者や就労したことのない人を救済する公的扶助制度の整備は重視されてこなかった。後述するように、これは互酬的ネットワークを通じた相互扶助によって代替されてきた。しかし、エルデルによれば、ネオリベリスト的な経済政策の下で競争が激化した結果、地縁血縁関係に基づく援助にも短期的な見返りが求められるようになり、相互扶助は成立しにくくなった。高齢者や障害者、寡婦の世帯や東部出身のクルド人移動者の世帯は、助け合いの関係のなかで足手まといになり、扶助の相手として魅力のない人々と見なされて、ネットワークから排除されるか、あるいは最初からネットワークに参加できず、ますます貧困化しているという。

2. エスニックな排除と貧困の重なり

EU諸国をはじめとする先進国では、金銭の欠乏という意味での貧困にかならずしも還元できない、雇用の不安定さや失業、社会参加する機会の減少、人間としての尊厳の喪失など、多元的な要素を内包する不平等である社会的排除の広がりが注目されてきた。ケイデルの「イスタンブールにおけるグローバリゼーションと社会的排除」[Keyder 2005]は、イスタンブールを事例に、トルコでも先進国と同じく、経済のグローバル化とともに収入、居住地、消費文化、そして日常的な生活実践の二極分化が進行し、ゲイテッド・コミュニティ(塙で囲われ、警備サービ

スを購買する住宅地)に象徴されるあからさまな富の誇示の対極に、人間としての尊厳の喪失や社会的孤立という現象が生まれていると指摘する。そして、上述のエルデルも最弱者としてあげた東部出身のクルド人移動者は、エスニックな差別が加わることで、最も深刻な排除の状況に置かれているという。

ケイデルによれば、トルコにおける社会的排除は、先進国におけるような福祉国家的な社会的包摂の失敗とは異なるあり方を示している。移動者は互酬的ネットワークを介して住居と職を得ることによって、地縁血縁でつながる同胞の地域コミュニティの一員として社会への帰属感を得ることができる。フォーマルな社会保障制度から排除されたとしても、インフォーマルな保障のしくみを通じて、人々は社会に包摂されるのである。フォーマルな社会保障が十分に行き渡らないトルコのような途上国では、このインフォーマルな保障のしくみを通じた社会的包摂こそが重要であった。現在の社会的排除は、そのようなしくみの破綻を原因としている。

だが、ケイデルによれば、クルド人移動者の排除がとりわけ深刻であるのは、彼らがそもそもインフォーマルな社会的包摂すら困難であることに起因しているという。1980年代半ばごろから、トルコでは国内の人口移動のパターンが変化し、イスタンブールなど大都市に流入する移動者のプロフィールに変化が表れた。それまでは黒海沿岸やアナトリア内陸からの人口流出が中心であったのが、国内でも最も貧しくクルド人住民が集中するアナトリア東部からの人口流出が中心となった。前者が、都市の雇用や教育機会などを求める移動だったのに対して、後者は軍とクルド人非合法組織の内戦が激化したこ

とにより、内戦から逃れる、あるいは村からの強制立ち退きのために居住地を出るという非自発的な移動であった。家畜や畑を放棄し、わずかな家財を携えて都市に流れ込んだこれらの人々の多くは、移動先の都市に頼れる親族や同郷出身者をもたない。そのため、互酬的ネットワークを通じて住居や職を得る、また同郷者がつくるコミュニティの一員として社会への帰属感を得る、というそれまでの移動者たちと同様の社会的包摂の過程をたどることができない。

さらに、彼らはエスニック・マイノリティであり内戦地域の出身者であるという理由で、差別や恐怖の感情の対象でもある。メディアはしばしばクルド人移動者を潜在的な犯罪者として扱い、社会不安の元凶というイメージを強化して、19世紀ヨーロッパの「危険な階級」を想起させるような言説を生産してきた。政府もまた、警察を動員して治安強化に乗り出すことで、これに加担してきた^(注3)。ケイデルによれば、住居や職を得ることやそれを通じて地域社会の一員としての帰属意識をもつことは、シティズンシップの実現に関わる問題である。にもかかわらず、クルド人移動者はエスニック・マイノリティであるがゆえに、彼らが抱える問題はシティズンシップの不完全な実現ではなく、彼ら自身が近代化されず伝統に固執することや文化の違いであると議論がすりかえられてしまう。エスニック・マイノリティであるがゆえに、クルド人移動者たちの貧困への不満や住居や仕事を要求する声は、社会的包摂への正当な要求とは見なされず、社会的統合をゆるがすものとして治安の対象として受け止められてしまうのである [Keyder 2005]。

3. 互酬的ネットワークの解体

公的な社会保障制度から排除された貧困層の人々にとって、地縁血縁でつながる人々とつくる互酬的ネットワークの喪失は、経済的な困窮だけでなく、いざというときに頼れる相手を失うことへの不安や失望などさまざまな感情を伴う経験でもある。ネットワークの解体をそのような複雑な過程としてとらえ、社会学的な分析を行った研究として、論集『貧困の諸状況』[Erdoğan 2002a]所収のシェン論文「出自に基づく連帯と相互扶助」[Şen 2002]とボラ論文「ないものをどうやって切り盛りするの? : 貧困, 女性, 世帯」[Bora 2002]があげられる。

論集全体の共通目的は、貧困を経済的な困窮だけでなく、人々がその内面で生き、意味を与え、切り抜けるためにさまざまな方法を編み出そうとする、社会的な一つの状態と見なし、自らを貧しいと感じる人々自身の語りを分析することにより、これを構造的にとらえることにある。分析に用いられたのは、イスタンブール・アンカラなど都市の低所得地区の住民およそ180人を対象とするインタビュー調査の結果である。

エスニック・アイデンティティに基づく連帯の弛緩

このなかで、シェン論文[Şen 2002]は、アレヴィーとクルドという二つのエスニック集団をとりあげ、人々がエスニック・アイデンティティに基づく互酬的ネットワークをいかに維持し、あるいは維持できずにいるのか、を描いた。アレヴィーとは、トルコで正統派とされるスンナ派ムスリムに対して、異端とされる少数派のムスリムである。アレヴィーもクルド人も、ともにネオリベラリズムの下で出自に基づく相互扶助の衰退を経験してきた。しかし、エスニック・アイデンティティに基づいて築かれる社会関係の

あり方には違いがみられるという。シェンはこれを、エスニック集団としての社会的位置の違いによって説明している。

もともと農村部に多かったアレヴィーは、都市化の初期に移動し、都市社会の適応に成功した。だが1980年の軍事クーデター後、国民統合のイデオロギーとしてトルコ・イスラム総合(Türk-İslam Sentezi)が採用され、また政治的イスラム運動が活発化すると、アレヴィーの非正統派としての位置づけはより公然としたものになった。このことはアレヴィーとしての宗教的文化的アイデンティティを強める結果となった。長期にわたる都市生活により、アレヴィーの移動者の内部には貧富差が生じていたが、90年代以降、アレヴィー・アイデンティティの高まりを背景として、社会的に成功した人々によって礼拝所(cemevi)が次々と建設された。そして、これを拠点に文化活動や、不十分ながらも奨学金貸与・仕事の斡旋などの支援活動が行われるようになった。ただし、このように組織化された交流の場も、実際には同郷出身者や親族が独占し、アレヴィーなら誰でも参加できるというわけではなかった。このような状況で、貧しいアレヴィーたちは、アレヴィー・コミュニティの外部との関係においてはアレヴィーであること(Alevilik)を強調する一方、相互扶助について語る際は、成功した同胞たちの自分たちに対する冷淡さを嘆くという。シェンは、アレヴィーのコミュニティ内部の相互不信の高まりと相互扶助の衰退とは、ネオリベラリズムの影響以前に、長い都市生活のなかで徐々に醸成されてきたものであるとみる。

これに対して、クルド人が置かれた状況はアレヴィーよりもさらに困難である。上述のよう

に、貧しい東部地方に集中するクルド人の都市への移動は、1980年代に始まった内戦に押し出される形で進行した。彼らは、分かちあう財をもたないほどに貧しいため、移動者同士で助け合えない。そればかりでなく、内戦が激化する以前に都市に移住した数少ない先発の移動者たちからも、政治的なことがらとは距離を置き面倒に巻き込まれたくないとして、関わりを避けられ、支援を受けられない。シェンによれば、困窮したクルド人移動者たちは、同胞のコミュニティに対して強い不信感をもち、助けを期待することすらない。彼らにとってクルドであること(Kürtlük)とは、連帯よりもむしろ不信の表現なのだという。

女性の経験

ボラ論文[Bora 2002]は、互酬的ネットワークの解体を、世帯を構成する人々、とりわけ妻・母としての女性がどのように経験しているのかを探究した。互酬的ネットワークは、男性だけでなく、女性に対しても、相互扶助を通じて他者との関係を構築し、また自らの社会的地位を維持する社会的な活動の領域を提供してきた。ボラは、そのようなネットワークが解体したことにより、女性の社会的な活動の領域が非常に狭まっていると指摘する。

ボラの観察によれば、相互扶助が途絶えるのは、全員があまりに貧しく、分かすべき資源がない場合である。だがそれ以外にも、上述のエルデルも指摘するように、片方の世帯だけが非常に貧しい場合には互酬的な関係が成立しにくく、やがて世帯間の関係は消滅するという。相互的であること、あるいは現在は相互的ではなくとも将来的には見返りが期待できることが、援助をするための前提とされるからである。こ

れには二つのパターンがある。ひとつは互酬的な関係が成立しないからといって相手が援助の求めに応じない場合。援助を受ける側は、「兄から借金したらすぐに催促されて傷ついた」といった語りが示すように、しばしば怒りの感情や不正感をもってこれを受け止め、相手との関係を断ってしまう。もうひとつは互酬的な関係がないにもかかわらず援助が行われる場合。この場合も、見返りが期待できないことからやがて関係が疎遠になり消滅するか、そうでなければ援助は相互扶助ではなく慈善行為と見なされ、援助を受ける側の自尊心を傷つけるという。

互酬的ネットワークから切断され、親族や隣人との日常的な貸し借りや食べ物のやりとりといった細々とした助けを得られなくなることは、とりわけ女性にとって大きな意味をもつ。女性にとって、家族に満足な食事を用意できないことや、子供の学用品を整えてやれないことは、妻や母としてのアイデンティティをゆるがされ傷つけられる経験である。男性も、一家の生計を支える夫としての責任を果たせないことで、世間に対する面目を失ったと感じ、誇りを傷つけられる。だが日々の食事に事欠き子供の空腹を満たしてやれないことを、夫が政治家や政治、あるいは自分たちの世界の外にいる「誰か」のせいにするのできるのにたいして、妻は自らの責任と感じ苦しむのである。ボラはこうした観察に基づき、貧困の経験がジェンダーによって異なり、そのような貧困の経験を通じてジェンダー役割が再生産されていると結論づけている。

II セイフティネットの破綻と再生

1. 貧乏は順番に

都市の移動者社会の互酬的ネットワークがより選択的で排他的なものへ変質し、解体にいたる背景には何があるのだろうか。ともに中東工科大学の都市計画学科で教鞭をとるウシュクとプナルジュオールの『貧乏は順番に』[Işık ve Pınarcıoğlu 2001]は、イスタンブールのゲジェコンドウ地区スルタンベイリの住民611世帯と当局関係者に対するアンケート調査とインタビュー調査に基づき、移動者社会における互酬的ネットワークの変化とその要因を論じている。

トルコでは1970年代まで、公有地の不法占拠は低所得層向けの住宅政策の欠如を代替するものとして黙認され、歴代政府は占有者に土地の財産権を現状追認的に認めてきた。途上国でしばしばみられる土地占拠・不法住宅建設の黙認は、国家のインフォーマルな福利供給のなかでも最も効果的な手段といわれる[Keyder 2005, 131]。そのような国家のクライエントリズムの下で、農村から都市に流入した移動者は、比較的容易に公有地を占拠し住居を確保することができた。

1980年代になり祖国党政権の下で経済自由化が進められ規制緩和政策がとられ都市の不動産価格が上昇すると、政府は財政赤字補填のために公有地を売却するようになり、公有地占拠に対するかつての寛容な措置はとられなくなった。だが祖国党政権は、ゲジェコンドウ住民からの支持を失わないために、その代償として、ゲジェコンドウ地区の建築基準を大幅に緩和した。これはゲジェコンドウ地区の土地の商業化

をいっきに推し進め、開発業者の手によって、それまでの平屋が次々とアパートに建て替えられた。「地主」であるゲジェコンドウ住民は、土地の提供と引き替えにアパートの一角を受け取り、濡れ手で粟の利益を手にした。一方、新たに都市にやってきた移動者たちは、住居を確保するのににはや公有地の占拠という手段には頼れないため、先発の移動者から比較的安価に家や土地を譲り受けるか借りるほかない。先発の移動者に後発の移動者が全面的に依存せざるを得ない状況がつくられることで、両者の関係はそれまでの対等なものから、階梯的で搾取を含んだ庇護的關係へと変化した。

著者らによれば、これは「貧乏は順番に」めぐってくるもので、いずれはそこから抜け出せるのだ、と人々に期待をもたせるしくみの成立であった。そしてこのようなしくみこそが、ネオリベラリスト経済政策の下で、アメリカ社会におけるような絶望した極貧層の発生を未然に防ぎ、社会的統合を維持する役割を果たしたのだという。しかし、その後ネオリベリズムの下で競争がさらに激化すると、ついにこのしくみも破綻する。庇護を提供してきた新旧の移動者の社会関係が解体すると、階梯の最底辺を構成する新参の移動者たちは、頼るものを失って脱出困難な永続的な貧困に陥ったのである。

本書で述べられている移動者たちの生存戦略やそれを支える社会関係の変化は、トルコ社会ではすでに一般的な認識となっているものかもしれない。本書の独自性は、大規模な実地の調査を通じて得た知見に基づいて、トルコの「社会的文脈に即して理論化を試みる」[Işık ve Pınarcıoğlu 2001, 37]点にあるといえよう。

2. トルコ型福祉レジームの限界

互酬的ネットワークが解体し、貧困層の生存戦略の手段が失われつつあるという認識は、これに代わる公的な救済措置の導入の必要性を主張する政策提言的な研究を登場させた。経済学者で、ポランニの『大転換』のトルコ語訳者でもあるブーラは、エスピン＝アンデルセンの福祉レジームの概念を援用することでこの問題を論じている。福祉レジームとは、失業や病気、老齢など人が人生で直面しうるさまざまなリスクへの対応を可能にするしくみを、福祉国家を含め包括的にとらえるための概念で、①国家の公的な社会保障制度に加えて、②市場からのサービス購入と、③家族やコミュニティ、隣人関係などを通じて得られる支援の、それぞれの役割に注目する[エスピン＝アンデルセン 2000]。

論文「経済危機に直面するトルコの伝統的福祉レジーム」[Buğra 2001]でブーラは、従来のトルコの福祉レジームの性格を論じる。それによれば、トルコでは従来、国家の福祉供給はきわめて不十分で、互酬的ネットワークなど家族部門の福祉供給への依存が大きい。家族部門の福祉供給の重要度が高いということ自体は、例えばドイツなど大陸ヨーロッパ諸国の特徴でもある。しかしこれらの国では家族部門による福祉を安定的に供給させるため国家が調整役を担うのに対して、トルコの国家はこの役割を放棄しており、近代的な福祉国家の体をなしていないというのがブーラの主張である。

ブーラによれば、国民の基本的な福利を保障し、リスクに対応するフォーマルな介入が不十分であるがゆえに、それを補うかたちで地縁血縁関係に基づく互酬的ネットワークが発達した。これは、国家のクライエントリズムの基盤

として機能し、国家のインフォーマルな福利供給を可能にするものであった。そのような互酬的關係に基づく福利供給が、トルコの「伝統的な福祉レジーム」をつくってきたという[Buğra 2001]。

トルコの国家の特徴として、例えばHeper (1991)など、政治学者がこれまで指摘してきたのは、社会に対する国家の強さである。だが、ブーラによれば、福祉国家的なフォーマルな介入は不十分であり、その意味でトルコの国家の強さは近代国家的なそれではないという。例えばGDPに占める経常支出や社会支出の水準は、トルコと同じく途上国としては比較的早期に福祉国家的な制度が整備されたラテンアメリカ諸国と比較した場合、けっして高くない。そのようなトルコでフォーマルな介入の不在を補ってきたもののこそが、互酬的ネットワークを通じた日常的な助け合いや国家資源(公有地・国営セクターの雇用)へのアクセスであった。

しかし、このしくみは今や破綻の危機に瀕している。ブーラは、ウシュクとブナルジュオールも注目したゲジェコンドゥの商業化、および国営セクターの民営化により、互酬的ネットワークを通じた住居と仕事の供給が困難になると予想する。さらに農業政策の失敗により農村が荒廃し、移動者が帰る場所を失ったことも、これに拍車をかけた。

従来のトルコ型福祉レジームでは貧困に対応することが困難となった現在、ブーラは、市民権に基づく公的な支援の制度化が必要であると主張する。地縁血縁にしか頼れない社会から、市民権に基づいて誰もが一定の支援を保障される社会への転換が必要とされ、ブーラの表現によれば、「国家が国家らしく振る舞う」[Buğra 2001,

25]ことが求められているのである。このような展望に立ってブーラは上述のケイデルとともに、連帯基金制度(正式名称は「貧困との戦いと社会的相互扶助と連帯のための基金」Yoksullukla Mücadele ve Sosyal Yardımlaşma ve Dayanışmayı Teşvik Fonu)の活用を提案している[Buğra and Keyder 2003]。

連帯基金は、トルコ初の普遍主義的な公的扶助制度として1986年に導入された。導入当時はまだ貧困問題が社会問題化しておらず、政治的なばらまきが目的だと批判されたこの制度は、現在でも、受給資格が曖昧で恣意的な運用が行われており、貧困層の救済という目的を十分に果たせていないとして批判を受けている[Şenses 1999]。しかし、唯一の公的扶助制度であることから、改善を前提に制度を活用すべきであるという立場に立つ政策定言的な調査研究が出されてきた(注4)。Buğra and Keyder(2003)およびWorld Bank(2003)は、それぞれ国連開発計画と世界銀行の支援を得て、基金の受給者と関係当局に大規模なインタビュー調査とアンケート調査を実施したもので、制度の問題点を指摘し、改善の方向性を示している。

おわりに

トルコ経済が高度成長を遂げた1970年代までは、近代化論的な思考枠組みが全盛だったこともあり、移動者の都市社会への適応と緩やかな社会的上昇の可能性を期待することができた。しかしそうした楽観的な見方はいまや影をひそめ、都市の最底辺に滞留する人々が陥った絶望的な貧困が注目されている。貧困の質的な変化に注目する「新しい貧困」の議論の魅力は、トル

コの貧困問題を、経済のグローバル化とネオリベラリズムの浸透に伴って先進国が経験している社会的排除と共通する現象として論じただけでなく、人々が漠然と感じてきた社会のしくみの変化と結びつけて論じてみせたところにある。ウシュクとプナルジュオールは著作は学術書としては異例の反響を呼んだが、これは、実地の調査を通じてこの作業を行ったためであろう。

ただし、本稿で紹介した議論に対しては反論もある。例えば経済学者シェンセスは、ウシュクとプナルジュオールは議論に対して、都市の貧困層は移動者だけでなく、女性世帯主・高齢者・障害者などを含み不均質であることに注意を呼びかける。彼はその不均質な集団に共通する貧困の原因として、ネオリベリスト経済政策と経済危機による雇用の不安定化や失業の増大の影響を重視し、移動者社会に特有の社会関係の変化を強調することには批判的である。また、貧困の原因が雇用の不安定化と失業にある以上、相互扶助が貧困層の重要な生活戦略であり続けている可能性は排除できないとし、互酬的関係の解体と相互扶助の衰退が貧困層全体に共通する趨勢であるという見方に対しても懐疑的である。そして、トルコの貧困問題を解決するために必要とされているのは、なにより産業政策を通じた雇用創出であって、政治的ばらまきだとしてその実効性が疑われてきた連帯基金ではない[Şenses 2001, 2003]。

シェンセスの指摘との関連で述べておこなう「新しい貧困」をめぐる議論で特に興味深いのは、互酬的ネットワークが解体し、社会的統合が弛緩しているという主張である。互酬的ネットワークが機能不全に陥り解体する過程につ

いては、本稿で紹介したŞen(2002)やBora(2002)のような優れた研究があるものの、まだ十分に明らかにされたとはいえない。都市社会学的な研究の蓄積は、都市の移動者の互酬的な地縁血縁関係は、都市生活のさまざまなリスクから身を守るため、農村社会の地縁血縁関係を都市で再生した「創られた伝統」であること、それは同質的な社会集団ではなく、同心円状のネットワークとして形成されており、利害の種類によって道具主義的に分裂・統合するという機能主義的な見方を示してきた[Güneş-Ayata 1991]。このような見方を採用するなら、ネットワークの基盤となる地縁血縁関係は、例えば同郷者意識による結びつきと、より親密な血縁関係とでは、相互扶助において果たす役割は異なることなどが考えられ、ネットワークの解体と一言でくくることのできない複雑な変化が起きていると予想される。貧困と社会的統合の問題について議論を深めるためには、今後は、これらの点を実証的に明らかにする作業が必要となろう。

(注1) ブーラとケイデルによれば、これにはEU加盟が現実味を帯びたことの影響があるという[Buğra and Keyder n.d., 19]

(注2) 新しい貧困と対をなすものとして、裕福さの新しいかたちに対する関心も高まっている。例えば代表的な社会科学系の学術誌『社会と知識』(*Toplum ve Bilim*)では、2001年の貧困問題特集号の姉妹編として、2005年には裕福さをめぐる論考を集めた特集号が組まれた。

(注3) 東部出身のクルド人移動者の貧困を治安の悪化に結びつける思考は、例えばストリートチルドレンの増加に対する過敏とも思われる最近の政府の反応にもみてとれる[村上 2005]

(注4) 一昨年、ボアジチ大学にブーラを代表とし、ケイ

デルやエルデル、ボラらが参加する社会政策フォーラム(Sosyal Politika Forumu)が設置された。フォーラムでは主に効果的な貧困政策の構築を目指す、政策提言的な研究が実施されている。フォーラムの活動についてはホームページ(<http://www.spf.boun.edu.tr>)を参照。

【文献リスト】

日本語文献

- エスピン＝アンデルセン 2000. 『ポスト工業経済の社会的基礎：市場・福祉国家・家族の政治経済学』(渡辺雅男・渡辺景子訳) 桜井書店 .
- バラ, アジット, フレデリック・ラベール 2005. 『グローバル化と社会的排除：貧困と社会問題への新しいアプローチ』(福原宏幸・中村健吾監訳) 昭和堂 .
- 村上薫 2005. 「トルコの児童福祉 制度の展開と理念の変化」宇佐見耕一編『新興工業国における社会福祉：最低生活保障と家族福祉』アジア経済研究所 .

外国語文献

- Bora, Aksu 2002. “‘Olmayanın Nesini İdare Edeceksin?’ : Yoksulluk, Kadınlar ve Hane.” In *Yoksulluk Halleri : Türkiye’de Kent Yoksulluğunun Toplumsal Görünümleri*. Erdoğan, Necmi(der.) İstanbul : Demokrasi Kitaplığı.
- Buğra, Ayşe 2001. “Ekonomik Kriz Karşısında Türkiye’nin Geleneksel Refah Rejimi.” *Toplum ve Bilim* 89 Yaz.
- Buğra, Ayşe and Çağlar Keyder 2003. *New Poverty and the Changing Welfare Regime of Turkey*. UNDP.
- Buğra, Ayşe and Çağlar Keyder n.d. “Framework Paper : Poverty and Social Policy in Contemporary Turkey.” ([http://www.tesev.org.tr/eng/events/Framework_paper_\(Bugra-Keyder \).doc](http://www.tesev.org.tr/eng/events/Framework_paper_(Bugra-Keyder).doc) 2006年1月20日閲覧)
- Erder, Sema 1995. “Yeni Kentliler ve Kentin Yeni Yoksulları.” *Toplum ve Bilim* 66 Bahar.
- Erdoğan, Necmi(der.) 2002a. *Yoksulluk Halleri : Türkiye’de Kent Yoksulluğunun Toplumsal Görünümleri*. İstanbul : Demokrasi Kitaplığı.

- Erdoğan, Necmi 2002b. "Giriş : Yoksulları Dinlemek." In *Yoksulluk Halleri : Türkiye'de Kent Yoksulluğunun Toplumsal Görünümleri*. Erdoğan, Necmi (der.) İstanbul : Demokrasi Kitaplığı.
- Förster, Michael and Marco Mira d'Ercole 2005. "Income Distribution and Poverty in OECD Countries in the Second Half of the 1990s." OECD Social, Employment and Migration Working Papers.
- Güneş-Ayata, Ayşe 1991. "Gecekondularda Kimlik Sorunu, Dayanışma Örüntüleri ve Hemşehrilik." *Toplum ve Bilim* 51/52 Güz-Kış.
- Heper, Metin (ed.) 1991. *Strong State and Economic Interest Groups : The Post-1980 Turkish Experience*. Berlin : Walter de Gruyter.
- Işık, Oğuz ve Melih Pınarcıoğlu 2001. *Nöbetleşe Yoksulluk : Sultanbeyli Örneği*, İstanbul : İletişim Yayınları.
- Keyder, Çağlar 2005. "Globalization and Social Exclusion in Istanbul." *International Journal of Urban and Regional Research* Vol.29 issue 1.
- Şen, Mustafa 2002. "Kökene Dayalı Dayanışma-Yardımlaşma : 'Zor İş'." In *Yoksulluk Halleri : Türkiye'de Kent Yoksulluğunun Toplumsal Görünümleri*. Erdoğan, Necmi (der.) İstanbul : Demokrasi Kitaplığı.
- Şenses, Fikret 1999. "Yoksullukla Mücadele ve Sosyal Yardımlaşma ve Dayanışmayı Teşvik Fonu." *ODTÜ Gelişme Dergisi* 26 (3-4)
2001. "Oğuz Işık ve M. Melih Pınarcıoğlu, Nöbetleşe Yoksulluk, Sultanbeyli Örneği, İletişim, İstanbul, 2001, 368s." *ODTÜ Gelişme Dergisi* 28 (3-4)
2003. "Ayşe Buğra ve Çağlar Keyder, New Poverty and the Changing Welfare Regime of Turkey (Yeni Yoksulluk ve Türkiye'nin Değişen Refah Rejimi), *Birleşmiş Milletler Kalkınma Programı, Ankara, 2003, s.59.*" *ODTÜ Gelişme Dergisi* 30 (1)
- World Bank 2003. *Turkey : Poverty and Coping After Crises*. World Bank Report No.24185-TR. (<http://www.soc.metu.edu.tr/socwww/resources.htm> 2005年11月1日閲覧)

(むらかみ かおる / 地域研究センター)